

谷口 あさこ

「じゃ、先にいつてきます」

玄関から夫の裕之の声がし、ドアの開く音が聞こえる。

「いつてらっしゃい」

私の声が届くかどうかのうちにドアが閉まる音がした。

キッチンの流し台でふきんを絞り、ふきん掛けにかける。エプロンはずしてパントリーの棚にしますと、二階に向かって呼びかける。

「晃平、お母さんも行ってくるね」

息子の晃平からの返事はない。まだ寝ているのだろう。いつもなら部屋まで行って様子を見てから出かけるのだが、今日はそんな気になれない。もう大学生なんだから放っておきなさい、という裕之の言葉を思い出し、私はそのまま玄関に向かった。

たたきには黒のポンプスが脱ぎっぱなしで転がっている。息子のスニーカーと自宅用のサンダル二足がきれいに並んでいるだけの空間にそれはとても異様に映った。

この靴を見て裕之はなにか思っただろうか。私の鼓動が自然と早くなる。

昨夜の帰宅は午後十一時を過ぎていた。酔いは醒めていたが、浮足立っていた。

シューズクローゼットから靴磨きのセットを取り出す。汚れ落としクリームを靴の表面にサツサと塗り、こびりついた昨夜の出来事を拭い落とすように拭く。黒のクリームをうっすらと付け丁寧に磨く。ポンプスは軽やかな光沢を取り戻した。ポンプスを履くとコートを羽織り、家を出る。足元が覚束ないのは昨夜の余韻か。

昨夜は職場の送別会だった。

「二次会、どうする？」

「カラオケ、予約します。駅の向こう側の店です」  
店から出たのは午後九時過ぎ。幹事の声に私と数

名の女性がざわめく。

「行く？」

「丸山さん、何歌うんですか」

「えー、工藤静香って知ってる？」

「知ってます。聞きたーい」

カラオケ店へ向かう一団の流れに身を任せて歩く。

辺りを見回すと水戸護守みと まもると目が合った。私はすっと

目をそむけて、隣の人たちの話に交じり、他愛もない話に声をあげて笑う。

カラオケ店にたどり着く。入り口の前で入るのもたついていると、後ろから呼び止められた。

「丸山さん」

振り向くと、水戸護守が後ろにいた。

「どうしたの」

私の問いに護守はうつむいた。控えめな声で後を続ける。

「ちよつと話しがあるんです」

年の離れた男の子に面と向かって言われ、こそばゆい気がした。

「何言ってるのよ。これが人生最後みたいな顔をして。また、いつでも遊びにきてよ」

彼は送別会の主役の一人だった。今まで学生アルバイトとして一緒に働いていた護守は、来月四月から違う設計会社に就職することが決まっている。

「今がいいんです。駄目ですか」

「主役が抜けたら困るでしょう」

「大丈夫です。前川に任せてます」

もう一人の主役の名前をあげて、護守は笑顔を見せた。それは彼が仕事によく見せた裏表のない笑顔だった。

私と護守はカラオケ店からそつと抜け出し、メイロード路から小路に入ったところにある居酒屋に入った。小さいテーブル席に案内され向かい合わせで座る。改めてビールで乾杯する。話しがあると喋っておきながら、護守はあまりしゃべらなかつた。

「一年間お疲れ様」

私は彼に話しかける。

「思えばあまりいい会社じゃなかったよね。『お弁当買ってきて』『酒買ってきて』ってこき使っちゃった

し、納期間際には徹夜残業させちゃったし、バイトなのに叱ったり、ごめんね」

安いアルバイト代にも関わらず、人手不足のため社員と同じように働かされていたことを申し訳なく思った。

「でも、丸山さんはいつも気遣ってくれました」

護守は真面目な顔だった。

「僕が計算間違いをして窓枠が収まらなくなったとき、丸山さんが社長や施工会社さんに報告して謝ってくれたじゃないですか。その後、一緒に考えて正しい施工図を作ってくれました。あの時は本当にご迷惑をおかけしました」

その時と同じように彼は律儀に頭を下げて謝った。

「そんなに謝らなくてもいいよ。バイトに責任を押し付けるわけにはいかないから。授業もあるのに徹夜させて大変だったよね」

「こんなこと言うと失礼かもしれないけど、最初は生産設計なんて馬鹿にしていたんです」

護守の言葉にうなずく。設計といえば建物の外観や室内を描く意匠設計のことを想像する人がほとんどだ。しかし、私が勤めている仮設計事務所は建築会社から依頼を受けて床や壁や窓や扉などの収まり具合を指示するための正確な生産設計図面を作成する会社だった。

「でも建物を建てるのに欠かせない仕事だと気づきました。丸山さんにはとても感謝しています」

「じゃあ、四月から働く会社でも生産設計志望？」

「はい。でも、最初は現場に張り付いて現場管理をさせられると思います」

他愛もない話を小一時間して店を出た。店の前で護守は今日のお礼を言う。

「お礼なんていいわよ」

酒に強くない私は軽く酔っていて、いい気分になっていた。

「でも、水戸君はうちの会社に馴染んでたから、明日から会えなくなるのは寂しいね」

「また、会ってくれますか」

護守の声音が少し硬くなった。

「いいよ、いつでも会社に遊びにおいで」

「そうじゃなくて……」

彼は口ごもる。

「丸山さんが、好きなんです」

直球の告白に私は驚いて歩みを止めた。彼の気持ちは何となく分かっていたが、こんなに直接的な言葉で言われるとは思っていなかった。彼の顔を見る。裏道は薄暗くて表情がよく見えなかった。

「丸山さんには旦那さんやお子さんがいることは知っています。でも、最後だから言っておきたくて」

「二十も年上だよ」

「年齢は関係ありません。丸山さんはとてもきれいです。いつも元気で若々しくて、いつも見惚れてました」

「ありがとう。でも、水戸君にはもつと他にふさわしい人が」

「そうじゃなくて」

護守は私を抱きすくめた。急なことに私は彼を突き放そうとする。小柄なのに案外力強く、腕の中から逃れることができない。逆にますます引き寄せられて、私は彼の肩に顔をうずめた。一次会の焼肉屋の匂いがする。会社のロッカーの匂いも、彼がいつもつけているシーブリーズの匂いも微かにする。その奥に男の生身の匂いが漂っている。

頭の中がぐるぐる回ってきた。酔いが頭に來たのだろうか。彼の腕の中が心地よくなってきた。

しばらくして、彼がおずおずと私の名を呼ぶのが聞こえた。私はそつと顔をあげる。彼の不安そうな目がそばにあった。薄い唇に目が行き、気がつけばどちらからともなく唇を交わしていた。

家から駅に向かう途中、その場面を何度も思い出しては胸が高鳴った。でも、あの時、護守が言った若々しいという言葉には、もうすでに若くはないという現実が含まれている。胸が高鳴るたびに、冷静な気持ちで自戒した。

駅に到着すると、ホームは人でごった返していた。どうやら電車が遅れているようだ。

「踏切の遮断棒が折れているんだって」

急に声をかけられ、横を向くと裕之がいた。

「十五分ぐらい待っているんだけど、全然来なくてさ」

「早く会社に行くって言ってたけど、大丈夫？」

「朝から来客の予定があるから、タクシーに乗ろうかな」

裕之は三つ先のターミナル駅までタクシーに乗るといふ。私はそれに便乗した。私の勤務先はそのターミナル駅にある。彼の勤務先はそこから別の線に乗り換えて都心に向かう方向にあった。

駅前のタクシー乗り場は思ったほど混んでいなかった。すぐに乗ることができた。

「こんなことなら、晃平をちゃんと起こしてから、家を出るんだった」

タクシーの後部座席で私は隣の裕之と話す。

「友達と遊びに行くって言ってたけど、遅刻しないかしら」

「鈴子は相変わらず過保護だな。もう大学生なんだから放っておけよ」

頭では理解しているのだが、身につけてしまった慣習からの脱却は難しい。

SNSの着信音が鳴る。スマートフォンを見ると護守からだった。鼓動がドクンと大きくなったが、素知らぬ顔をしてそのままコートのポケットにスマホをしまう。

「何？」

「お店からのお知らせ」

裕之の質問に嘘をつく。そして、何気なさを装って外の景色を眺めた。

ターミナル駅の近くでタクシーから降り、裕之と別れる。私は歩きながらスマホの画面をチェックした。護守から「昨夜はありがとうございました」と送られてきていた。何に對してのお礼だろう。送別會對する一般的な儀礼？ 居酒屋でおごったから？ キスしたから？ そして、私は何と返せばいいのだろうか。ありがとう。大丈夫。これからも頑張つて。どれもそぐわない気がする。結局、ウサギが「気にしないで」といつているスタンプを送った。

表示された画面を見る。なんだか、やり慣れた女みたいに見えて、思わず苦笑する。すぐ既読の文字が表示された。返信が来るのか、来ないのか、続きが気になるけれど、気にするそぶりを見せたくない。私はカバンの中にスマホをしまった。

駅前通りに面したビルの二階に私の勤務先、俵設

計事務所はあった。社長とアルバイトを含めても二十人ほどの事務所にはまだ人影もまばらだった。昨日でアルバイトを終了したはずの前川巧がいたので、少し驚いた。

「どうしたの、前川君。新しい会社をクビになったの」「まだ、入社式も済んでいないのに縁起でもないこと言わないでくださいよ」

前川は笑顔で答える。

「昨夜の送別会のお礼をしにきたんです」「殊勝だね」

できる営業マンみたいだ。彼もこの四月から他所の建設会社に就職が決まっている。外交的な性格の前川は地道な設計業務よりも営業業務のほうが似合っている。

私はさりげなく辺りを見回したが、護守の姿はなかった。残念な気持ちと安心感が同時に押し寄せ、私は肩を落とした。

前川が私のそばに来て小さな声で尋ねた。「あの後、鈴子さんと水戸、カラオケに来なかったでしょ。二人で抜け駆け駆けずるいですよ」

私は落ち着いたふりをしながら、何と答えようか思案する。隠すのもおかしい。

「最後だから、上司と部下で慰労会。居酒屋で軽く飲んで帰ったの。二次会行かなくて大丈夫だった？」

「全然問題ないですよ。しいて言えば、鈴子さんの工藤静香、聞きたかったな」

前川の調子のいいセリフに私は笑った。

「私も前川君の十八番の関ジャニ、聞きたかったな」私のおどけた返しに前川は一瞬驚いたがすぐ笑顔になった。

「あ、晃平に聞きました？ じゃ今度、晃平君も誘つてカラオケ行きましょう」

前川は愛想よく言うのと、新たに出社してきた人たちに声をあげて寄つていった。

彼は晃平と同じ大学に通っていて、偶然にも同じサッカーサークルの先輩だった。大学一年生の晃平にとつて四年生の先輩たちは遠い存在だったが、前川は持ち前の調子よさと人懐っこさのおかげで分け隔てなく接してくれたという。おそらく、新しい会社でもすぐ馴染んでやっていけるだろう。

それに比べると護守は地味だった。けれど、決して暗いわけではなく、二十二歳という年齢にしては落ち着いていたというべきなのだろう。雑談の時も淡々としゃべっている印象を受けたが、話下手ではなかった。感情の起伏が少ないので一緒に仕事をするうえでは振り回わされず、やりやすかった。新しい会社でも受け入れられるだろう。

つい、わが子を見守る母親の立場に立っている自分に失笑する。そして、そんな男性にときめいている自分が可笑しかった。

四月に入り、慌ただしく過ごしているうちにもう五月が目前に迫ってきている。世の中は春の陽気とゴールデンウィークで浮かれていた。会社は休みだった。裕之は顧客との二泊の接待ゴルフ、晃平は五日間のサークルの合宿で家には誰もいない。

「だから、暇つぶしに私の所に来た、と」

友人の板垣久美はタンクトップの上にパーカーを羽織りながら立ち上がった。私は汗だくの体をタオルで拭う。久しぶりのヨガレッスンのフルコースは体の隅々まで心地よい疲れが行き渡る。

「違うわよ。久しぶりの女子会、楽しみにしてたんだから。久美の恋バナとかも聞きたいし」

「私の恋バナかあ。最近何かあったかなあ。四十歳のウェブデザイナーの話、したっけ？」

「聞いてない。何それ？」

「またあとで。それより、鈴子の方こそなんかあったんじゃないの。そんな顔してる」

「秘密よ。一応、既婚者なんで」

「いやいや、結婚と恋は別でしょ。会社に若い子が多いから、きれいなお姉さん、モテるよね」

私は噴き出す。

「いやいや、きれいなお姉さんって何よ」

「背も高くてスレンダーで、ヨガ教室に通っている意識高い系。仕事もバリバリこなして社長の信頼も厚い。これで惚れない子なんかいないでしょ」

「そんな女、逆に男が引くんじゃない？」

「まあ、この歳で独身ならそうかもしれないけど、既婚者はいんじゃない。ところで、晃平君いくつになった？」

久美は自分が独身なのを棚に上げて言う。彼女と出会ったのは、晃平が中学に入学したのを機に、私が俵設計事務所に再就職した時だった。久美はその時すでにバリバリのキャリアウーマンだった。

仕事に興味にと独身生活を謳歌する久美と仕事と家庭を両立するために奔走する私は、生き方は違うものの同じ年齢のためすぐ仲良くなった。ヨガと健康食にはまっていた彼女は四〇歳を前にして退職。今は自宅マンションの部屋でヨガレッスンと体いい食事作りの教室を開いている。

「晃平は今年で二十歳」

「もう成人?! あの子ビ黒サッカー小僧だった晃平君が大人になるの?」

「今もサッカー小僧だよ」

私の中で晃平はいつまで経っても子供だったが、客観的に見ると二十歳は立派な大人だった。

「そりゃあ私も歳とるわ」

久美の言葉に私は領いた。

「もうじき四十三になるし」

「私なんて三月生まれだからもうなっちゃったわよ」  
そうは言うものの久美の体はしなやかで肌ハリもあり美しかった。運動面にも食事面にも気を使っているだけのことはある。

「今日のお昼は、金時豆と豚肉の甘辛味噌炒めと根菜類のスープと雑穀米。デザートもあるよ」

「OLのランチみたいでいいね」

「みたいじゃなくて、あんたはOLでしょ」

久美と他愛ない会話をしながら料理を手伝おうとしたその時、スマートフォンが鳴った。カバンから取り出すと社長からだった。

「お休み中にごめん。今どこにいる?」

「市内にいますけど」

「今から会社に出てこれないかな」

「今から?」

「花山町の施工中の物件なんだけど、現状が図面と違っていて苦情がかかってきたそう。俺は建築会社に行ってくるから、鈴子さんは現場をみてきてくれないか」

「えー、今日は連休ですよ。それにその物件私の担当じゃありません」

「担当の山下がつかまらなくて。鈴子さん、これ手伝ってるから対応できるよね」

「他に人はいないんですか」

「旅行だったり繋がらなかつたりで誰もいない。それにあの施主が厄介なんだ。すぐ行かないとゴネられて余計手間になるから。頼んだよ」

一方的に電話を切られ、私は画面をじっと見つめた。

「何？ 仕事？」

「社長から。図面と現地が違うって苦情が入ってるから、施主の所に行ってきたって」

「さすが社長の信頼厚い鈴子さん。休みなのに大変」

「もう、久美も知ってるでしょ、花園町のおじいちゃん。連休中だから現場を閉所しているのに勝手に中に入ってるんだよ」

「あー、あのグチグチおじいちゃんか。早く行った方がいいね」

私はヨガウェアから普通の服に着替える。

「仕事終わったら、ここに戻ってくる？」

久美の質問に首を傾げる。今夜は彼女の部屋に泊めてもらう予定だった。しかし、今から現場に行き話をつめて会社に戻り図面を手直したら、今日中には終わるかどうかわかった。

「分らないから、荷物は全部持っていくわ」

「会社で一泊？」

「不吉なこと言わないで」

私は荷物をまとめると、名残惜しくも久美の部屋を出た。

施工場で建設会社の現場監督と一緒に施主から散々文句を言われた後、遅い昼食を食べ、会社に着いたのは午後四時過ぎだった。

「ごくろうさん」

社長が迎えてくれる。事務所内を見渡すとガランとした室内でパソコンに向かっている男性が一人いた。鼓動が早くなる。

「水戸君？」

彼は顔をあげると一礼した。

「図面の直しに人が多い方がいいだろ。でも、社員が全然つかまらなくて。前川にも電話したんだけど旅行中だった」

社長の言葉を継ぐように護守が言う。

「あいつ、大学のサークルの合宿にOBで参加してるんです」

その言葉に私は頷く。晃平と一緒に静岡の合宿所にいるのだろう。

私は施主から言われた苦情に対して施工会社と話し合った修正箇所を社長に伝え、三人で手分けして図面の直しに取りかかった。

午後六時頃、社長は先約があると言って、私に後を任せ帰っていった。事務所に二人きり……私は意識しないように仕事に集中する。護守も同じ気持ちだったのか一言もしゃべらなかつた。マウスとキーボードのカチカチいう音が事務所内に響いた。

集中したおかげで八時には新しい図面が出来あがった。パソコンのメールで施工会社の現場監督宛てに送信する。すぐにでも現場監督から返信が来るかもしれないと思って、しばらく画面を眺めていると、缶ビールが目の前に差し出された。

「お疲れ様です」

護守が真面目な顔で隣に立っていた。もう片方の手にもう一本ビール缶を持っている。

「ありがとう」

私は彼から缶を受け取る。事務所の冷蔵庫には缶ビールが隙間なく並んでいて、終業後は誰でも自由に飲むことができた。プルタブを開け、どちらともなく乾杯する。

「連休中なのに、それにもうバイト辞めてるのに、呼び出してごめんね」

「いいんです。部屋でヒマしてましたから」

「実家には帰らないの」

彼の実家は新潟の方だと聞いたことがあった。

「春休みに帰ってましたし、今は研修中で慌ただしくて、一人でゆっくりしたかったんです」

「ゆっくりしてたのに、ごめんね」

「いいんです。……丸山さんに会えて嬉しいです」

私は護守を見上げた。彼は目が合うと気まずそうに顔をそむけて、缶に口をつける。私も黙ってパソコン画面に目を向けながらビールを飲んだ。

隣の机にもたれている彼を盗み見る。背は私より少し高いくらい。体の線も細く体重は私より軽い

かもしれない。腕も手首も骨ばつていて、でも、抱きしめる力は強かった。顔に当たる肩の骨の感触を、首筋の熱さを思い出し、私の体は少し火照る。

「丸山さんはゴールデンウィーク、どこかに行かないんですか」

護守の問いに私は我に返り領いた。

「子供が大きくなると、家族一緒に旅行することもなくて、せいぜい近場に日帰りで出かけるぐらいかな」

晃平が小さいときは、海で魚を釣ったり、高原でキャンプをして星を見たりといろんなところに行つて、いろんなことを経験した。

護守とポツリポツリと会話をしながら、現場監督の返信を待った。二人だけの空間が照れ臭かったが、嫌な気持ちにはならなかった。

缶ビールを飲み終わっても返信は来なかった。護守もすでに飲み切つていて、もう一缶開けようか躊躇している感じだった。

「水戸君、もう帰つていいよ。私は現場監督に連絡して、ここで待機しておくから」

「僕も待ちます」

護守は意気込んで言つてから、急に声を落とした。

「……迷惑じゃなければ」

私は否定も肯定もせぬまま苦笑した。スマートフォンを手にすると現場監督の携帯番号に電話をかける。現場監督は自宅に帰つていた。今から中身を確認して明日の朝までに連絡すると約束してくれた。

「今日はもう終了。いったん帰ろうか」

これで明日も休日出勤確定だ。私はどこでも対応できるように、会社専用のクラウドに図面のデータを保存する。CADのソフトが入っているタブレットを棚から取り出そうと立ち上がった瞬間、ふらついた。お酒にあまり強くないのに空腹のまま飲んでしまったせいで足に酔いがきていようだった。

護守が両手で私の肩を支えてくれる。

「ありがと」

礼を言うか言わぬかのうちに抱きすくめられた。

私は目を閉じて彼の体に上半身を預ける。護守にいなざなわれるままに顔をあげ、彼の口づけを受ける。ためらいがちだった彼の唇は次第に強く熱く唇や首筋

に押しあてられ、頭の芯が次第にとろけていく。

「いい？」

かすれ声を漏らした薄い唇に、私は黙って唇を押しつける。

その晩、事務所の応接コーナーの長ソファアの上で私は彼と過ごした。

ゴールデンウィークの最終日、やっと落ち着いて休みを取ることができた。家族三人でドライブがてら海の幸を食べに行くことにした。

空は青く日差しは陽気だった。裕之は好きな洋楽を聞きながら気分よくハンドルを握っている。私は後部座席で窓の外に流れて映る緑の木々を眺め、まどろんでいた。小さいころはお母さんの隣がいいと言つて一緒に後部座席に座っていた晃平は、今では大きな体を助手席に預けてスマートフォンをいじっている。

窓を流れる景色が緑から褪めた青色に変わった。どこまでも続く水面にたまに海であることをほのめかすように白い波が泡立っている。

私たちは港近くの古びた食堂に入った。そこは、新鮮なシラス丼を食べさせることで有名だった。四人掛けのテーブルについて、シラス丼を三つ頼んだ。

「合宿はどうだった？」

裕之が隣の晃平に尋ねる。

「別に、なんもないよ。結構真面目に練習してた」

「へえ、今の大学生つて遊ばないんだな。サークルなんて合コンのためにあるようなもんじゃなかったか」

「お父さんの時代とは違うよ。もちろん、そういうサークルもあるけどさ」

「そういえば、前川君も合宿に行つてたんだっけ」

私は向かいの晃平に話しかける。

「そう、合宿の途中で前川さんのスマホに電話かかってきて、社長さんから呼び出しがかかったって。ブラック企業だね、お母さんの会社」

「鈴子も休みの間、ずつと振り回されてたもんな。徹夜までして、お疲れさん」

「やつぱりブラックかな。給料はいいんだけど」

内心に冷たいものが流れるのを笑顔で隠した。

「俵さんはいいい上司だったよ。ブラックなことさせ

るような人じゃなかった」

社長の俵浩二はもとも裕之と同じ建設会社に勤めていた。私が再就職するときに、独立して自分の事務所を持った俵社長に裕之が紹介してくれたのだ。

店員さんがお盆にシラス井を載せて運んできた。井鉢の上にシラスがこんもりと乗っかっている。緑のシソの千切りが食欲をそそる。別皿に大根おろしが盛られ、赤だしのお椀もついてきた。

「おいしそう」

私は割り箸を持ちながら手を合わせた。裕之はすでにお汁に手を付けている。晃平はスマートフォンを取り出して写真を撮ると、井に箸をつけた。

あの日の翌朝、私は応接コーナーのソファから身を起こした。まだ朝の四時過ぎだったが、ブラインドの降りた窓辺はうつつらと明るかった。

向かいの一人掛けソファを見る。Tシャツにジーンズ姿の護守が窮屈そうな恰好で眠っていた。

私は衝立で隔てられただけの応接コーナーから出ると、パソコンを立ち上げた。現場監督からのメールが深夜に届いている。手直し部分が細かく指示されていた。私はCADシステムを立ち上げ図面に修正を入れていく。

その日の午後、護守と別れ、修正した図面を持って現場監督と一緒に施主の所へ説明に行った。それからも休み明けすぐに手直し工事が始められるよう業者に連絡をとったり、担当の山下さんに詳細を引き継いだりして、ゴールデンウィークは過ぎていった。シラス井を食べ終わった後、また車を走らせて道の駅に寄った。ここには小さいけれど本格的な温泉施設があり、家族で何度か来たことがあった。

女湯はそれほど混んでいなかった。広い湯船に長く青い葉が浮いている。菖蒲のさわやかな匂いが鼻孔をくすぐった。そうか、今日は子供の日だった。改めて認識してお湯につかる。

家のどこかに眠っている兜を思い出した。いつからかさなくなってしまったのだろう。

広い窓の外を眺める。竹垣に囲まれた小さな庭には、濃いピンクのつつじの花が咲き乱れていた。

老年の女性二人がおしゃべりをしながら、湯船に入ってきて私の前を通る。枯れ枝のような細い腕、垂

れた乳房とたるんだ臀部。私は思わず自分の二の腕を見る。筋肉のなくなった腕は柔らかく、肌の表面には細かいソバカスのようなシミが無数にできている。晃平が小さい時に外で一緒に遊んだ時の日焼けがこうしてシミになっっていくなんて、若い頃は考えもしなかった。

肩にお湯をかける。肌を濡らす湯は水滴とはならず、透明なシミとなつて広がって垂れていく。

「体きれいじゃないから恥ずかしい」

ソファに押し倒され護守に服を脱がされながら、私は顔を横にそむける。

「きれいです。柔らかくてすべすべしていて気持ちいい」

護守は私の胸に顔を埋め、唇を乳首につける。私の中に甘い郷愁が広がる。乳首を吸われ、思わず声が漏れる。彼は優しく乳房を愛撫し続け、私は彼の頭を抱き、手のひらで髪をなでた。

彼の愛撫は次第に体の下の方へと下がっていく。私はたまらなくなつて、彼が望むままに受け入れた。突然、老年女性たちの派手な笑い声が風呂場に響き渡る。私は我に返つて顔をあげた。菖蒲の葉が目の前を漂っていく。私は湯船から立ち上がった。

六月になった。仕事は相変わらず忙しい。護守からはSNSでたまに連絡があつたが、私は当たり障りなく返信するだけで会うことはなかった。

ここ数日、体調がスッキリせず、微熱が続いていた。五月の疲れが今になつて症状として現れたかもしれない。仕事帰りに、駅から出て最寄りのドラッグストアに寄った。所狭しと並んでいる商品棚から疲労回復の薬を探した。

『妊娠』

赤字で書かれた文字が目飛び込んできて、歩みを止める。心臓がドクンと激しく鳴る。晃平を妊娠した時も今と同じように微熱が出て体がだるかつたことを思い出した。二十年前と同じことが今私の体の中で起こっているのだろうか。

私はもともと生理不順な体質だった。最近は生理もたまにしかなく、このまま閉経してしまうのだろうと思っていた。裕之とセックスするときも避妊し

なかったが、晃平以外に子が出来たことはなかった。妊娠しにくい体なのだと言っていた。

あの夜、護守は私の外で二回射精した。でも、避妊具を着けてない以上、妊娠をする可能性はゼロではない。

私は妊娠検査薬を買おうと、微熱で浮つく体に鞭を入れるように足早に帰宅した。家にはまだ誰も帰ってきていなかった。裕之からは八時頃に帰るとの連絡を受けていた。晃平はいつも通りサークルの仲間と一緒にいるのだろう。

靴を脱ぐのもどかしく、トイレに駆け込んだ。検査薬の反応はすぐに表れた。陽性。トイレから出ると、リビングのソファに座りこんだ。ハッキリと浮かび上がる赤いラインを呆然と眺める。私、まだ子を産むことができるんだ。見当違いな感慨が湧いてきて少し笑った。

私は自分のお腹に手を当てる。この中に赤ちゃんがいる。初めての事ではないのに、まったく実感がない。

四十二歳になって赤ちゃんができるとは考えもしなかった。これが夫との子であっても産むことはためらわれる。高齢出産、年をとってからの育児、仕事との両立。問題が山のようにあり、それらと向き合い乗り越えていく気力は出そうにない。そして、これは夫の子ではないのだ。産むという解答に至るのは難しかった。

突然辺りが明るくなった。

「電気もつけずに、どうしたんだい」

裕之が驚いた顔で部屋の入り口に立っていた。

「ちょっと疲れちゃって」

私は脇に置いていた検査薬と箱にそっと手を乗せて隠す。

「大丈夫か」

裕之は何も気づかずに窓際へ行きカーテンを閉める。そのすきに私は手の下に隠したものをカバンの中にした。

「無理せずに、今日はもう休んだら」

「ご飯の準備、何もできてなくて」

「いいよ、ありもので済ますから」

そう言って、裕之はパントリーの棚をのぞいてカ

ップラーメンを選んでいる。

「ありがとう」

私は彼の言葉に甘えて二階の寝室に上がる。服を着替えると自分のベッドにもぐりこんだ。暗い中で横になってお腹を抱える。

墮ろしに行かなければいけない。胎児が小さいうちに墮ろしてしまいたい。

最寄りの産婦人科は晃平を産んだ病院だった。個人病院で建物は立派だったが、室内は殺風景だ。二十年前、分娩した私は四人部屋の窓際のベッドに寝かされていた。赤ちゃんたちは別室で寝ていて、三時間おきにミルクを飲ませるために晃平のもとに向かう。廊下は薄暗く、赤ちゃんたちの泣き声がうっすらと聞こえる。私はその声にせかされるように足早に歩く。人気のない廊下に、パタパタと足音が響く。

看護師さんが晃平を抱え、私の腕の中にそっと置く。私は慣れぬ手つきで晃平を抱くと授乳スペースに腰かける。乳房をむき出しにすると晃平の口に乳首を含ませる。乳の出も悪いし、赤ちゃんの吸い方も下手で、乳首が痛くなってくる。「根気よく続けていれば、おっぱいもいっぱい出るようになりますよ」看護師の声掛けを信じて、私は笑顔で赤ちゃんを見つめた。

その病院で今度は子を墮ろそうとしている。私はなま温かい布団の中で暗闇を見つめていた。

翌朝、いつも通りに目を覚ました。微熱はまだ少しありそうだったが、起き上がってみても気分はそれほど悪くなかった。

服装で気を引き締めよう。クローゼットから透感のある黒いボウタイのブラウスと白い膝下丈のタイトスカートを選ぶ。身支度している気配を感じたのだろう。隣のベッドから裕之の声がした。

「おはよう。もう大丈夫なの？」

「うん、ましになった。起こしちゃうてごめんね」

私の言葉に裕之はあいまいにうなずいて寝返りをうつ。もう少し寝るのだろう。彼が起きる時間にはまだ間があった。

そっと寝室を出る。隣の部屋の扉を細く開けて中をのぞく。晃平の寝ている姿を確認してから静かに



扉を閉めた。

階下に降りて、まずカバンの中に入れた使用済みの検査薬と化粧箱を取り出す。昨日と変わらずに赤い陽性のラインが浮き上がっている。それらを乱雑にチラシで包み、白いレジ袋に入れてしっかりと結んでからゴミ箱に捨てる。ダイニングの椅子に座り、スマートフォンで産婦人科を検索した。晃平を産んだ病院は建て替えたようでモダンな建物に変わっていた。室内もインテリアにこだわった豪華な内装になっている。初診からインターネット予約ができたので、明日の午後に予約を入れた。

裕之が少し早く出社したので、私は久しぶりに女性専用車両に乗った。前を座る人のカバンにピンクのマークがぶら下がっているのが目に入った。マタニティマーク。彼女のお腹はまだ大きくなかったが、そこに赤ちゃんがいるのだろう。私は目をそむけた。彼女を正視することができなかった。

ターミナル駅で電車を降りる。改札に向かう流れの中にお腹の大きい女性がいた。パンツスーツにスニーカーを履き、階段の手すりにつかまりながら他の人たちと同じ速さで歩いている。今まで気づかなかっただけで、妊娠中でも働いている人は結構いるのだ。

晃平を妊娠した時、私は会社勤めをしていた。裕之が働いている建設会社の関連会社で生産設計業務を委託されている会社だった。裕之と結婚してすぐに晃平を身ごもった私は妊娠が分かった時点で退職を決めた。当時はそういうものだと思っていたから躊躇などなかった。

改札の外に出る。お腹の大きい女性ははっきりした足取りで反対方向へ歩いていく。私はそれに目を背けて会社へと急ぐ。パンプスのヒールがカツカツと鳴り耳障りだった。

この日は何をすることも心ここにあらずの状態だった。

「丸山さん、この資料の図面違いませんか？」

施主との打ち合わせ資料をホッチキス留めしていたパートタイマーの坂田香織が尋ねる。資料の中を見てみると、二階の躯体図が違う案件のものだった。「うわ、危ない。見つけてくれてありがとう」

私はお礼を言って、正しい躯体図を出し直す。こんな不注意も明日の午後になればすつきりなくなるはずだ。

残業はせずにさつさと帰宅した。無駄な物思いをしないよう、すぐに夕飯づくりに取りかかる。下処理済みのイワシと千切りしたショウガを醤油と砂糖とみりんで炊いていく。焦がさないように注意しながら、その横でシメジと豆腐の味噌汁を作る。

晃平が赤ちゃんだったころ、大人用に煮物を作りながら、イワシの身をすりつぶして団子にしツミレのような離乳食を作っていたことを思い出した。裕之は味の濃いものが好きだったが、赤ちゃんには食べさせられないので薄味のを別に作っていた。

私は頭を軽く振り、思い出を断ち切る。鍋の中のイワシに意識を向けた。

翌日、午前中で仕事を切り上げると予約していた病院へ行った。会社から歩いて十五分ほどの住宅街の中に建っている。ネットで見たとおり建物は新しくなっていて、院長先生も代替わりしたようだった。

待合室で座っている間、落ち着かなかった。平日といえども何人かの女性が座っている。どの女性も幸せで満足気な顔をしているように見える。誰もがお腹の子が元気に産まれてくることを望んでいるのだろう。次第に自分のお腹の子が不憫に思えてきた。

診察室に入ると六十歳前後の男性医師が座っていた。

「妊娠の可能性があるということですね。最後の生理はいつでしたか」と問診が始まる。

初産の時のこと、現在の体調などを尋ねられる。医師の質問と受け答えは決まった形があるのかとてもスムーズで言葉を挟む余地がない。

「じゃあ、エコー検査します」

「あの、随ろせますか」

間の悪い問いに、医師は会話を止めて、私をまじまじと見る。そして、優しく答えた。

「年齢のことを気にしていますか？ 大丈夫ですよ。最近では四十歳以上で初産の方もたくさんいますし、妊娠って個人差が大きいので、若いから安心とか高齢だから大変とは一概に言えません。随ろす必要は

ありませんよ」

そして、彼は、このエコーは4D画像を取り入れていて云々と説明しながら、準備をしていく。私が聞きたいことは、そういうことではない。悶々とした思いが渦巻く。

椅子が倒れ、医師が棒状のものを膣に入れる。看護師が私から見えやすい位置にモニターを移動した。白黒の映像が画面に映る。

「ああ、胎囊が見えますね。胎芽もあります」

画面に子宮の内部が映っている。白い中に黒い楕円系のあるものがある。その中に小豆の形のような白い輪郭が見える。これが赤ちゃんです、とカーソルでグルリと指し示す。その小さい白い輪郭の中で点滅するように動く部分があった。

「心拍もすっかり確認できますね」

「動いているの、心臓ですか？」

「はい、元気に動いてるでしょう」

それは結構な速さで一定の動きを繰り返している。ドクドクドクドクと鼓動が聞こえるようだった。

私は小さな心臓の動きから目が離せない。必死で動いているその姿は私のすべてを打ちのめした。夫も不倫も年齢も仕事も外聞も内聞も全部消えていく。何もなくなった私の中に愛しさだけが芽生えてくる。

この子を産みたい。

その思いは私を一気に捕らえ離さなかった。

病院を後にし、家へ向かう。

どうしてもこの子を産みたい。私はお腹を撫でながら自問自答を繰り返す。

この子を産むためには、どうしたらいいのだろう。裕之に本当のことを言っこの子を家族として受け入れてもらう。それは虫が良すぎるといふものだろう。裕之と別れて一人で産む。それは思い描いていたものと違った。護守と一緒に産み育てる。護守に対してそこまでの執着を持っていなかった。

だが、今まさに鼓動を打っている小さな命を簡単に摘み取ってしまう結論にはもう戻れない。あのエコーの映像はそれほどまでに衝撃的だった。

二十年前に診察した時は、画像を見た医師が淡々と妊娠を告げただけだった。

「妊娠したみたい、三か月だつて」あの時は、何も考えずに裕之に報告していた。いつのセックスで出来たかなど考えもしなかった。裕之はどうだったのだろう。彼は他人の子かもしれないと疑っている様子はなかった。証拠など何もないのに自分の子だと信じて喜んでいた。

あの時と同じようにこのまま産んでしまえばいい。言い訳も言い逃れもせずに堂々と産んでしまえばいい。

裕之とセックスをしたのは十日ほど前で、その前となると三か月以上も前になる。明らかに裕之の子ではない。でも、しばらく経ってから報告すれば、一か月の差など気づかれないのではないか。このまま裕之との子供として生み育てていくことができるかもしれない。

今はまだ妊娠をしてないふりをしよう。あと一か月ほど経ってから、妊娠したみたいと言えば裕之は信じてくれるのではないだろうか。

都合のいい考えだと分かっている。良心の呵責だつてないわけではない。だが、子を墮ろすという後ろめたさに比べると、裕之をだます後ろめたさの方が軽かった。

家に早く帰り着いたものの、気持ちが悪く着かす夕ご飯の支度が進まない。今、七週目ということは一か月後には十三週目、つわりが始まる時期だ。そうなったら妊娠は隠せないだろう。どうやったら裕之に疑いの念を持たせずに済むのだろう。

スマートフォンからSNSの着信音が鳴る。見ると護守からだつた。

「研修が終わって、新築病院の現場に配属となりました。やる事が多くて大変です」

もう護守には会わないようにしよう。私の妊娠を知れば彼は自分の子だと気づくだろう。その時、彼がどういう行動に出るか予想がつかない。

ただ、一度と会わなかったとしても、私の出産の話はいずれ何処かから知る可能性は大きい。

先のことを考えてもどうしようもない。小手先と言われようとも先延ばしと言われようとも、このまま真実を伏せた状況が少しでも長く続くよう努力する。そして、このまま赤ちゃんを産みたい。

「ただいま」

裕之が帰ってきた。いつの間にか考え込んでいて時間が経つのを忘れていた。

「ごめん、夕ご飯の支度できてないわ」

「今から作るのも時間がかかるし、どっかに食べに行こうか」

外食の気分ではなかったが、いつも通りに振る舞いたかったので、裕之の提案に乗る。駅前中華料理店へ向かった。

席に通されるとすぐに裕之は店員に注文をする。

「とりあえず生ビール。鈴子は？」

「今日はやめておく」

「明日も仕事あるしな」

裕之はメニューに目を通しながら適当に相槌をうつ。さっそく定食にしようか単品にしようか悩んでいる。香辛料の匂いが胃を刺激し、グウと軽くお腹が鳴った。倦怠感はあるものの胃は普通に動いているのがちよつと嬉しかった。私の体は赤ちゃんのために栄養を摂りたがっている。赤ちゃんを生かそうとしている。私は八宝菜定食を頼んだ。裕之はギョウザとエビチリとチャーハンを単品で頼む。

スマートフォンが鳴った。「ただいま」晃平からの連絡だった。

「晃平が家に着いたみたい」

「おう、あいつも呼べよ。飲むかな」

「まだ未成年よ」

私は晃平を中華料理店に誘った。

しばらくして晃平が店に現れた。裕之の隣に座り、店内を見回しながら言った。

「この店来るの、久しぶり」

晃平が大学生になるまでは、よくこの店に三人で来ていた。裕之に運ばれてきたギョウザを見て、オレも食べたいと言ったのもう一つ追加する。

晃平は小さい頃からこのギョウザが好きだった。タレをべちゃべちゃとテーブルに垂らしながらギョウザにかぶりついていた幼い姿が鮮明に浮かぶ。横を向き私の顔を見上げて、こんなおいしいもの初めて食べたと目を輝かせて言う。私はお手拭きを持つと子供の口元についたタレを拭いてあげる。

向かい側の席で裕之と晃平が酒を飲む飲まないで

言い合っている。私は隣に座る幼い子の姿を感じながらほえんでいた。

その夜、私は裕之のベッドに入り込み、セックスをした。

それから何日が過ぎ、私の体調は元に戻った。つわりもまだなく、普段どおりの生活を送っていた。

あれから、裕之よりも少し遅く家を出ることにしている。女性専用車両に乗るためだった。混んではいるもののほかの車両に較べると圧迫感がだいぶ少ない。先日見かけたお腹の大きな女性を車両内で見つけ親近感をもった。ターミナル駅で下車し、彼女はスニーカーで足早に歩いていく。私も彼女に負けないようパンプスのヒールを響かせて会社へ向かう。

赤ちゃんのことを考えて、毎朝事務所で飲んでいたコーヒーを止めた。代わりに葉酸が入っているヨーグルトジュースを飲む。隣の席の坂田香織が紙パック飲料のストローをくわえている私を見て不思議そうな顔をした。

昼からの施工会社との打ち合わせのために図面を打ち出しているとき、急にお腹が痛くなった。下腹部がギューと絞られるような痛みには思わずしゃがみ込んだ。股の間から何かがこぼれていく。

「どうしました？」

香織が驚いて寄ってくる。私はお腹を抱え込んでかぶりを振るのが精一杯だった。股の間からどんどんこぼれていく。

「丸山さん、トイレに行きましょう。立てますか」

私は彼女に支えられて立ち上がった。液体が足をつたう感触。ふくらはぎの内側に赤い筋が描かれている。血？ 私は痛さをこらえながら事務所を出ると廊下の突き当りのトイレへ向かう。冷や汗で目の前が暗くなり香織の腕にすがりつきながら歩く。

トイレの個室の前で香織にお礼を言つて、扉を閉める。真つ赤に染まった下着を脱ぐと便座に座る。血が静かにとめどなく垂れてくる。ダメ。ダメ。私はハシカチで臍口をふさぐ。

出て行かないで。出て行かないで。私の赤ちゃん。お腹の痛みを耐えながら、私は切実に願った。

帰宅してジャケットとスカートを脱ぎ捨てると、そのまま自分のベッドの布団にもぐりこんだ。誰にも会いたくなかった。一人になれる場所はこの狭くて暗い布団の中だけだ。

あの後、香織が濡れたタオルや下着や生理用品などをトイレまで持ってきてくれた。私は彼女へのお礼も午後からの仕事の引き継ぎもそこそこに会社を早退した。お腹の痛みを我慢しながら、駅前でタクシーを拾うと、先日診察してもらった産婦人科へ行った。

医師はエコー検診を済ますと口早に言った。

「今回は残念でした。産まれて来られない赤ちゃんもいます。お母さんのせいじゃないから気を落とさないでください」

その時も今も涙は出ない。布団の中で時折痛むお腹を押さえ闇を見つめる。私の赤ちゃん、どうしていなくなっちゃったの。あなたに会いたかったのに。繰り返し繰り返し同じことを思う。

晃平が帰ってきてても、裕之が帰ってきてても、私は布団の中から出なかった。

「気分が悪くて」

私の言葉に、二人とも「働きすぎだよ」「ゆっくりしておき」と優しく返してくれる。

暗闇の中でも目は冴え頭も冴えていた。私は軽くなったお腹を抱え込みうずくまっていた。

次の日、布団から出る気力もなく、私は会社に欠席の連絡をする。電話に出た俵社長は、「仕事はこっちで何とかするから、ゆっくり休んで体調直して」と言ってくれた。昨日あの場に社長はいなかったが、香織から状況は伝わっているはずだった。事務所内には他にも数名が在席していたから、あれを流産と気がついたかどうかは分からないが、血を流して早退したことは皆に広まっているだろう。でも、そんなことはどうでもよかった。

ベッドで仰向けになって天井をじつと見つめる。

白い天井は窓から入る外の光を柔らかく反射していた。ぼんやりした陰影が天井の隅から立ち上がり、明るさとせめぎあっている。

昔もこうして天井を見つめていたことがあった。

晃平の風邪をもらって高熱を出し寝込んでいた。布団に横になって天井を眺めながらぼんやりしていたら、「お母さん」と晃平が部屋に入ってきた。幼稚園から帰ってきて録画したアニメを観ていたのだが飽きてしまったのだろう。

「風邪がうつるから部屋の外に出ていなさい。テーブルにおやつ置いてあるから」

私はマスクをしながら晃平を優しく諭す。晃平は「嫌」と言っ、私の布団に潜りこむ。「お母さんと一緒にいい」腕にすがりつく小さな体を私は優しく撫ぜた。

白々とした天井にうずもれていた記憶が映し出されるような気がして、私は顔を背けて目をつぶった。

赤ちゃんが気持ちよさそうに昼寝をしている横で私は黙々と針を動かしている。赤ちゃんの外出用の帽子を作っていた。水色と白の細かいチェック模様のチュールリップハットに赤い車のアプリケ。赤ちゃんは喜んでくれるだろうか。早くこれをかぶらせて散歩に行きたい。私は眠っている赤ちゃんの頭に作りかけの帽子をのせ微笑んだ。

うつらうつらとまどろんではお腹の痛みで目が覚める。そんなに強い痛みではなかったが、同時に胸に突き刺さるような痛みを感じ、私は布団の中で丸まって獣のように唸る。そうして、また、まどろんでいく。

赤ちゃんがハイハイをしている。動くイヌのぬいぐるみを追いかけている。追いついて手を伸ばすとぬいぐるみが倒れる。横倒しになって足だけ機械的に動いているぬいぐるみを赤ちゃんは黙って見ている。私は笑ってそれを起こし、床を歩かせる。赤ちゃんは嬉しそうにまた追いかけていく。

こうして一日が過ぎていった。

会社を休んで一週間近く経つ。裕之も晃平も私のことを気にかけて飲み物を持ってきたり声をかけたりしてくれる。でも、一番有り難かったのは、私に一人の時間をくれたことだった。彼らは普段どおりに会社や学校へ出かけ、家には私一人だった。

もうお腹が痛むこともなく、体は元に戻っているようだった。だが、私はまどろみと目覚めを繰り返す

て過ごしていた。

トイレへ行くために布団から出て、ついでに水を飲み、階段へ降りる。リビングもダイニングもキッチンも思いのほか片付いていた。床にほこりが目立つものの生活するうえでは問題ないだろう。皿やカップも洗いかごに置かれ、洗濯物もちゃんと外に干している。最低限の家事をしている夫と息子はもう十分に大人で、私がいなくても大丈夫なだろう。

リビングのソファに座っていると、スマートフォンの音が震えた。護守からだった。「体調崩して休んでいると聞きました。大丈夫ですか」心配してくれているのだろうが、胸の奥がざわざわする。彼の存在は疎ましくも不安でもあった。私は返信せずにスマホを遠くに置いた。

ぼんやりと窓の外を眺める。いい天気だった。六月なのに五月晴れという言葉がふさわしい青空だった。

ふと兜のことを思い出した。晃平が初めて端午の節句を迎える際に買った兜。十歳ぐらいになるまでは毎年飾っていた。

私は納戸の中を探した。作り付けの棚の上の方に木箱が置いてあった。腕を伸ばし背伸びをして重たい箱をゆっくりとおろす。箱の上にはうっすら積もったほこりを払い、蓋を開ける。薄布に包まれた兜を取り出した。結構重たい。晃平が三歳ぐらいのとき、兜をかぶろうとしたが、その重さにバランスを崩し転んだことがあった。かぶりがかかったと駄々をこねて泣いていた姿がよみがえり口元が緩む。お腹にいた子が男の子だったら、また飾れるのに。それとも新しいのを買うかしら。薄暗い納戸の中でじつと座って鈍く光る兜を眺めていた。

兜の木箱をもとに戻そうとして、その横の段ボールに目に行く。古い箱で何が入っているのか覚えていない。下におろして開けてみた。

赤ちゃんの服が入っていた。取り出して広げてみると新生児用のロンパースだった。胸元にミルクのシミが残っているもののきれいに保管されている。私は次々と手に取る。百日祝い用の和服を模したカバーオール。外出用のクマの耳がついたマント。よそ行き用の白いシャツと紺色のズボンのカバーオールには赤色の蝶ネクタイがついている。ほとんど使わ

なかった小さな靴下。全部、晃平が赤ちゃんの時に着ていた服だった。紺色と白のチェック柄のチュールアップハットが出てきた。黄色い車のアプリーケが付いている。私が手縫いしたものだ。その下に紙袋が入っている。中身を取り出すと水色と白のチェック柄の生地だった。手芸店で買ったままの布生地。

私は思わずその布を抱きしめた。二人目の赤ちゃんが出来たら、これでおそろいの帽子を作ろうと買ったことを思い出した。

この箱のものは私が二人目の赤ちゃんのために大事に取っておいたものだ。二十年近く前の私は次の赤ちゃんが産まれてくることを望み、心待ちにしながらしまっておいたのだ。

自然と涙が出てくる。喉の奥で声を詰まらせながら私は泣いた。

その夜、裕之が寝室に入ってきた。私が背を向けたまましていると彼が話しかけてきた。

「鈴子、大丈夫か？ まだ気分が悪いのか？ ちゃんと食べているか？」

裕之の声は優しくかった。

「……ごめんなさい。大丈夫だから」

「いや、こんな状態、大丈夫じゃないだろ」

ベッドのspringsがギシと軋み、端が沈み込んだ。裕之がベッドに座ったようだった。

「会社で何かあったのか」

「……」

「俵さんに聞いたけど、下血したんだって。ちゃんと病院へ行ったのかい」

私は動かなかった。

「大きな病気かもしれないから、早く病院へ行った方がいい」

あれは下血ではない。病院へもちゃんと行った。もうすべて終わっているのだ。終わっている？ 本当に？

「一人で病院へ行くのが不安なら俺も付き合うから」

「……違うの」

私の声に裕之は口を閉ざす。辛抱強く次の言葉を待ってくれる。

「……流産したの」

「え……」

今度は裕之が言葉に詰まる。動揺しているようだった。私は黙って彼の言葉を待った。彼も私の言葉を待っているようだった。

「……嘘よ。ホルモンの変化で月経異常だったの」

「びっくりした。変な冗談はよせよ」

彼は軽く笑った。

「……」

「体は大丈夫か？ 病院には行かなくていいの？」

「……うん」

「それなら良かった」

「……」

冗談でもなんでもいい。まだ赤ちゃんをあきらめたくなかった。

「……もし、赤ちゃんを授かるとしたら、男と女どちらがいい？」

「この歳で、そんな夢みたいなこと……」

裕之は途中まで言いかけた言葉を濁した。体調崩してナーバスになっている妻の話を無下にしてはいけないと思ったのだろう。

「俺は男でも女でもどっちでもいい」

彼は布団越しに私の体に手をかけた。

「でも、子供は晃平一人で満足だよ。いい子に育ててくれてありがとう。これからも三人で仲良く暮らしていこう」

裕之の正直な気持ちは伝わってきたが、それは私の望むものではなかった。

「ゆっくり体をいたわって。早く元気になって、また三人で旅行にでも行こう」

裕之はそういうと、自分のベッドに入った。

私は布団の中に潜る。暗闇に満ちた世界。居心地はいいが、ここに私が望むものはない。では、どこにあるのだろう。暗闇の中で考え続ける。急に小さな明かりが点灯する。その明かりに手を伸ばす。スマートフォンの着信だった。

「僕にできることなら何でもします」

護守からだった。私は明るい画面をしばらく見つめていた。

次の日は週末で、裕之も晃平も家にいるようだっ

た。私は二階の寝室の扉を開け、廊下に出た。隣の部屋の扉が開き晃平が顔をのぞかせた。

「お母さん、大丈夫？」

心配そうな表情をしていた。

「……ごめんね、心配かけて」

私はよるけながら階段を下りようとすると、晃平が後ろから支えてくれた。私たちはゆっくりと階段を下りた。

「鈴子、大丈夫か。何か飲むか？ 食べるか？」

階下で裕之が迎えてくれた。私の腕を支えてくれる。

「……まず、お風呂に入りたい」

私は二人の手をゆっくりと除けると一人で脱衣所へ向かう。洗面台の鏡には髪の毛が乱れ青白い顔した女が映っていた。目の下には隈があり、肌はかさついていた。赤ちゃんを産めない女にふさわしい顔だった。

湯船に湯を張りながら、私は服を脱いだ。下着につけた紙ナプキンはずす。茶色いしみが少しついていただけで、膣口に滴る液体はない。風呂場に入るとシャワーで下半身をきれいに洗った。髪の毛を洗い、丁寧にトリートメントをする。上半身もボディウォッシュをたっぷり泡だてて洗い、シャワーで流す。湯船に浸かりながら、美容クリームで顔をパックし、丁寧に歯を磨いた。包み込む温もりは私の中に固くこびりついた気持ちを少しほぐす。流れていった赤ちゃんと、愛おしむように撫ぜた。

一時間ほどしてお風呂から上がった私の顔は、頬が蒸気して赤くなり、肌にも潤いが出てきている。私は念入りにボディクリームを塗り、髪の毛を丁寧に乾かし、化粧下地で顔を整えていく。鏡に映る自分は見違えるようだった。これなら大丈夫。

洗面所から出てきた私を見て、裕之も晃平も安心した表情を見せた。

「風呂からなかなか出てこないから、スライムみたいに溶けちゃったのかと思ったよ」

裕之が普段はあまり言わない冗談を言う。晃平はダイニングテーブルに皿を置きながら声をかけてくる。

「お母さんの好きなドーナツ買ってきたんだ。食べる？」

私はウォーターサーバーから水を汲んで飲むと、二人に無言で微笑み返した。二階の寝室へ戻り、白と水色のストライプシャツを着てベージュのワイドパンツを履きウエストのリボンを結ぶ。銀色のメッシュバッグに身の回りのものを詰めた。

再び一階に降りた私の姿を見て、二人は驚いた。

「どこ行くの？」「どうした？」

「久美の所に行ってくる。体にいいご飯を食べてくるわ」

私は笑顔で答える。二人とも怪訝そうな顔をする。

「急に動いて大丈夫なのかい？ 本調子じゃないんだろう」

「大丈夫よ、だって私、病気じゃないもの」

私は玄関に行く。たたきの端に黒のパンプスが置いてある。内側に黒い皮が貼られていて分りにくいが、あの時の血がこびりついているはずだ。

私はシューズクローゼットから白のスニーカーを出して履く。裕之と晃平がリビングから顔をのぞかせる。

「本当に大丈夫か？」

「大丈夫よ」

「お母さん、何時ごろ帰ってくるの？」

「分からないわ。泊まってくるかも」

私は血のこびりついた黒い靴を手に持つと、いつてきますと軽やかに家を出る。二人は玄関の外まで追ってきたが、それ以上は付いてこなかった。

今年は梅雨入りが遅いらしく、真上から照らす陽光は真夏のようなだった。足元が少し覚束ないものの駅まで歩くことができた。駅の手前のコンビニ前にゴミ箱を見つけ、私は持っていた黒い靴を捨てた。

駅構内に入り、待合の椅子に座る。スマートフォンを取り出すと、SNSで久美に連絡を取った。

『久美のご飯が食べたい。女性ホルモンを整えてくれるメニューがいい』

既読の表示がつかなかった。ちょうどレッスン中なのかもしれない。私は続けて護守に連絡を取る。

『時間ある？ 会いたい』

こちらから既読の表示はつかなかった。

まだ時間はたっぷりある。私は立ち上がると改札へと向かった。